

昔々イツァンドラの村に呪術師（mwaliimu）がいて、木の占い盤を使って未来を予見する才能を持っていた。このイツァンドラの村には「蝙蝠の穴」と呼ばれる場所があり、そこで盤を読む術や他の多くのことが繰り広げられていた。そこには工房もあり、剣の鍛え方や、コモロ男性の伝統衣装であるジョホの作り方などが学ばれていた。村のムワリムは占い盤による予見を余所者に教えようとはしなかったもので、それを修得することは誰にも許されていなかった。

ある日、ハマハメの村の男がこの術を学ぶためにそこへ行くことにした。そこに着くと、彼は服を脱いで裸でイツァンドラの通りをさまよい、気が狂っているふりをした。しかし、学習時間になると、彼は入り口の戸口に座って、木の葉を使いながら授業を書き取った。「この馬鹿は一体何をしているんだ」と、彼を大馬鹿者だ思っている村人たちは言ったが、彼は自分のしていることをちゃんとわかっていた。何ヶ月もの間座って学んだ後、とうとう彼は占い盤による予見術を十分修得したと感じた。

そうするうちに、干魘がイツァンドラを襲い、三ヶ月の間一滴も雨が降らなかった。村に雨が降るには祈祷が必要だった。そこでムワリムはこの干魘の解決法を見つけるために占い盤を読みに出かけた。その結果、愚かで無垢な生き物の首をはねて生け贄にしなければならぬことになった。村のスルタンがそれを聞いて叫んだ：

「ああ、そう言えばハマハメ村には馬鹿がいて、今ここにおるそうだ。そいつの首をはねよう」。

ムワリムが答えた：

「もちろんです！ で、どのように段取りをつけましょう？」

スルタンは立ち上がりピーナッツ入りヌガーを用意させた。彼はそれをムワリムの所に持って行き、ムワリムは呪いをかけた。それを食べた者は死ぬことになる。

馬鹿者は宮殿に来させられたが、彼はそこに足を踏み入れたことも、入り口を見たこともなかった。彼は着くと直ちにスルタンの許に通された。スルタンはすぐに自分の玉座に座るように勧め、その横には例のヌガーがあった。スルタンは彼に語りかけた：

「我が子よ、すまないことにお前がここイツァンドラにいることをついぞ知らなかった。私はお前の父親の親友なので、私にとってもお前は息子のようなものなのだ。この菓子はお前のためのものだ。さあ食べなさい」。

馬鹿者はスルタンに顔を向けて言った：

「親愛なるスルタン様、格言に《尊敬に値するのは、ひとかけのパンを出す時であり、丸ごと出されたならば、それは出した側に戻って来て食べることになる》とありますので、それを食べて下さい」。

彼はそれに手をつけずに去って行った。

結局、ハマハメの男は占い盤を読む術を修めて、彼が生け贄になることから逃れることが出来たのだ。彼は、愚か者がそれほど愚かではなかったことを示し、修得した術を携えて戻って来た。